この哀れな暗黒破壊神にも祝福を！

鎧武　極

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウルトラマンノアに敗れ去ったダークザギは、何の偶然か異世界に転生直前の水の女神アクアと佐藤和真のいる部屋に来ていた。再び蘇るべく、佐藤和真の代わりにアクアと共に異世界に転生したのだが、それが彼の運の尽きであった

馬鹿な駄女神に頭おかしい厨二病魔法少女にドＭ剣士、更には変なストーカー女に役立たずアンデットウィッチなどに振り回され、彼の明日はどっちだ！

※６月９日、タイトル変更

目次

序章だよ　ｂｙ作者 ―――― 1
強すぎてニューゲームだが文句あっか？　ｂｙダークザギ ―――― 6
俺の名前って、ダサい？　ｂｙダークザギ ―――― 17
カエルの口のなかって、意外と生暖かいです　ｂｙめぐみん ―――― 27
もっと私を嬲ってくれ！　ｂｙダクネス ―――― 38
ようやく私のでば・・・　ｂｙ駄女神 ―――― 49
初めてまともな奴に遭遇　ｂｙダークザギ ―――― 60
２人は爆裂道共同体！　ｂｙめぐみん ―――― 69
こ、これぞ私の求めていたお仕置き！　ｂｙダクネス ―――― 78

序章だよ　ｂｙ作者

なぜだ、なぜ俺が負けた！いくつもの作戦を練り、何年も何年も掛けて俺が復活するための準備を整え、奴の力を取り戻させるためにスペースビーストをぶつけたのに、なぜ俺は負けた!?俺の力は最大だった。奴と俺は同じはずなのに、なぜ俺は奴に勝てなかったんだ!?はやり、模造品である俺は奴には一生勝てないのか？所詮作られた俺は、こうやって死ぬのがお似合いってか？そんなことがあってたまるものか！

俺は絶対に生き返ってやる！奴を倒せないとしても、俺は絶対に生き返ってやる！

「散々バカにしてきた男に、一緒に連れていかれるってどんな気持ちだ？」

あ？なんだこの声。確か、俺はこのまま地獄に落ちる筈なのに、なぜこんな空間にいる。それよりも、あの緑のジャージを着たガキと水色の髪をした女の周りにあるあの光は何だ？一体何が起こっているんだ？

それに宙に浮いているあの天使みたいな女、一体何をしようとしてる？

「いやぁー！　こんな男と異世界行きなんてあああああ！」

異世界だと!?そうか分かったぞ、ここはよく人間が見ている「ライトノベル」とかで死んだ人間が転生するための場所ってわけか！だったら、このチャンスを逃す手はねえ

！
「その異世界、俺様が貴様の代わりに行ってやるよガキいいいいいいいいいい!!」
「うえ！　な、なんだあの黒いやつ！」
　突然の事に驚いたのか、ガキと女と天使みたいなやつは俺の方に顔を向ける。だがもう遅い！俺はすでにガキを光の外に押し出しており、それと同時に光はより一層輝きを増していた。もうすぐ異世界への転送が始まるのだろう。
「そ、その黒い体に赤い胸のクリスタル・・・貴方まさか!?」
　天使の女が気づいたが、既に俺と水色の髪の女は頭上に開いた異世界へのゲートに吸い込まれていた。さあ、再び復活の時だ！
「この俺・・・ダークザギの復活だあああああああああ!!」
　そうして、俺と女は異世界へと転生した。さあ、これからは思う存分に暴れさせてもらうぜ！

　なんて思ってた時期が俺にもありましたよ。ええ全く。俺は過去の記憶に浸りなが

ら、なぜあの時女の方を吹き飛ばさなかったのかを非常に後悔している。まさか、かつては多くの人間から恐れられ、世界を恐怖の底へ突き落したこの俺が・・・・・

「なにやってるのよザギ！　早くクエストに行くわよ！」

あの時俺と一緒に転生された『水の女神（笑）』のアクア。一応女神らしく羽衣を着けてはいるが、その本質はバカの一言もあれば十分なぐらいの超大バカ駄女神である。ちなみに、今一番俺を悩ませている原因の一つはこいつだ。

「そうですよザギ！　早くクエストに行かないと、私の爆裂魔法の餌食になるモンスターが減ってしまうではありませんか」

全身黒の魔法使いの格好をした赤い眼が特徴のロリっ子のめぐみん。上級職の『アークウィザード』という魔法使いなのだが、使えるのは爆裂魔法の一つのみ。しかも、一発撃ったら一歩も動けなくなるという超欠陥だらけの役立たずの魔法使いだ。こいつもアクア同様、俺を悩ませている原因の一つだ。

「安心しろめぐみん。モンスターなら私がすべて引き寄せてやる！　だから、いつもより強めの爆裂魔法をモンスターごと私に放ってくれ！」

金髪碧眼の鎧騎士のような恰好をした女の名はダクネス。こちらも上級職の「クルセイダー」なのだが、武器は一切使えずに防御だけが取り柄のめぐみん同様超欠陥だらけの騎士だ。しかもこいつ、先の言動から分かるようにマゾヒストだ。しかも「ド」が付

く。アクア、めぐみんに続いて俺を悩ませている原因の一つだ。
　そんなパーティーメンバーを見て俺はつくづく自分の選択ミスを呪った。そもそも、あそこでアクアを突き飛ばさなかったのが俺の間違いだったのだ。ガキの方――たしかカスマとかそんな名前だったはず（アクア曰く）――だと後々面倒くさい事になるだろうと思って突き飛ばしてしまったが、今思えばガキの方がよかったのかもしれない。すまないカスマ君よ。俺は今日ほど人間に謝ったことはない。
「はぁ・・・はいはい行きますよ～」
　集会所の椅子に座っていた俺は重い体を起こして３人の元へと向かう。窓を見ると、今の俺の体は人間の高校生と同じぐらいの身長と顔つきであり、漆黒の髪に血のように赤い眼が特徴の少年の姿となっていた。これが俺のこの世界での姿だ。
　一応冒険者という最弱職をやっている。無論、まさかこの俺がこいつらに劣っているというわけではない。むしろすべてのステータスを振り切っており、この世界にいる魔王を倒せる救世主にもなれると言われたのだが、性格に難あり過ぎるということで最弱職になってしまったのだ。まさかこの俺が最弱職に就くことになるとは・・・
　ああこの世界にいる幸福の女神エリスよ、今までの悪行はすべて反省しますからこの俺にも祝福をください！冗談無しで！
「ああ～ザギ様、やはり今日もカッコいいですね・・・」

そう呟いているのは銀髪の顔に傷のある少女、クリスだ。なにかと俺に付きまとっているが、はっきり言ってアクア達より１００倍マシである。もっとも、俺のストーカーという点を除けばなのだが。

全く、俺はこの世界で生きて行けるのだろうか？

強すぎてニューゲームだが文句あっか?　ｂｙダークザギ

　目の前に広がるのは、さっきの黒い空間とは違い、地球での中世のヨーロッパのようなレンガ造りの家が立ち並んでいる光景だった。上を見上げると、青く広がる空に白く浮かぶ雲、そしてその空を飛ぶ鳥。馬車を引く馬にそれに乗っている人間、遊び騒ぐ子ども。

「フフフ・・・やったぞ!　俺は復活したんだ!　ノアに復讐を出来ないのが心残りだが、そんな事はどうでもいい!　俺はこの世界で、再び暗黒破壊神として君臨し・・・」

「ちょおおおおおっとあんたあああ‼?」

「おげっ!」

　青髪の女が急に俺の首を絞めてきた。ちょっ!?息ができないからマジでそれはやめろ!

「急に出てきたと思ったら、なんであの男の方を突き飛ばしたのよ!　突き飛ばされるのは癪だけど、こんなところに来るぐらいなら突き飛ばされた方がマシよ!」

「い、いい加減に首を絞めるのやめろ!」

頭にきて女の手を引き剥がして突き飛ばす。どうやら、力は十分使えるようだが体の方がそれについていけないみたいだ。引き剥がすだけでまあまあ疲れた。これは元の姿を保つのもある程度の限界があるな。

俺は一瞬、山岡一の姿にでもなろうかと思ったのだが、さすがにあいつの姿で生きていくのも飽きてたし、何よりノアの事を思い出してしまうから、どうせならもっと若い人間に化けようと思った。

「なら、丁度高校生ぐらいのがいいか？　だいたいこういう転生物は高校生が主人公って定番だしな」

「ちょっとアンタ、さっきから何ブツブツ言ってるのよ！」

「さて、となると容姿は・・・」

「無視するんじゃないわよ！」

なにやら雑音（青髪の女）が聞こえるが、そんなことはどうだっていい。とりあえず、俺の体の色とエナジーコアの色から髪と目の色を決めて、容姿は地球で見てきたやつらを参考にして・・・っと。よし、大体このぐらいか

「さて、新しい俺様の物語を始めようか」

俺は体を黒いエネルギーで包み込むと、その体を徐々に変化させていった。漆黒の髪に赤い目、容姿はとても整っており、イケメンの部類に入るほど。服は別にどうでもよ

かったので突き飛ばした餓鬼のジャージを黒色にしたものを着ている。
「ヴェエエエ!!　な、なんか真っ黒な奴が真っ黒な柱に飲まれたと思ったら、真っ黒な服装の人間が出てきたんですけどー!!」
「おい雑音(女)、少し黙ってろ」
「ねえちょっと待って?　今、『雑音』と書いて『女』って読まなかった?　私の勘違いよね?」
「・・・・・」
「ねえ何か答えてよ!　私『雑音』じゃないんですけどおおおお!　水の女神なんですけどおおおおおおおおお!」
　何やら雑音が大きくなってきたので、とりあえずこいつは置いていこう。そう思い、俺はこの世界での第一歩を踏み歩いた。
「ふげっ!!」
「あ、こけた」
　未だに体が力に付いてこれていないのか、第一歩を盛大に踏み外した俺だった。

「ほほお、この世界はそんな世界観なのか」

「そういうこと。それで、私はこの世界で魔王を討伐するまで帰れないってわけ」

青髪の女――自称水の女神アクアに話を聞くこと十数分。この世界の事が大方分かってきた俺は、頭の中で状況を整理していた。この世界はいわゆるＲＰＧでよくある『魔王に支配された世界』らしい。元はこの世界の勇者たちが魔王を討伐しようとしていたのだが、結果は惨敗。死んだ人間の魂は、俺もいたあの空間に送られて再び転生できるらしいのだが、あまりにも怖い思いをした勇者たちがそれを拒み、徐々に魔王を討伐しようとする者たちは少なくなっていったらしい。そこで、「地球の人間もこの世界に呼んで魔王を討伐させよー！」というバカな考えの元、こいつが地球で死んだ人間を次々とこの世界にチート特典を付けて転生させたらしい。あの時もその最中だったのだが、俺が突き飛ばした餓鬼――名はカスマと言うらしい――をアクアがおちょくったところ、自分をその特典として転生しようとしていた最中だったらしい。だが、俺が突き飛ばしてしまったためアクアの所有権が自動的に俺に移動し、魔王を討伐するまで帰れないということらしい。

正直言って・・・

「めんどくさい」

「なんで!?」

「いや、だってなんで俺が世界を救わないといけないんだよ?」

暗黒破壊神と恐れられ、世界を恐怖の底に叩き落としたこの俺が、なぜそんなヒーローみたいなことをしなければならない。そういうめんどくさい事は光の巨人とかに任せておけばいいんだよ

正直なところ、逆に魔王側についてその魔王を裏から操る方がやりやすいんだが、そういうことはこの場で言えば一気に怪しまれるだろう。俺とアクアが今いるのは、冒険者たちが集まるギルドだ。無論ここには多くの冒険者たちが集まっている。本気を出せばこいつらを倒すことなど造作もないのだが、何分今は体が力に付いていけてないため何が起こるか分からない。

「まあこの世界で収入がないのは困るし、とりあえず冒険者にはなってやるよ」

「随分上から目線なのが気に食わないけど、そうしなさいザギ！」

そっくりそのまま返そう。お前の方が相当上から目線だぞ！少々ムカつくが、人目が多すぎるここでは派手な事は出来ない。ここは抑えて、受付へと向かおう。

「はい、今日はどうなさいましたか?」

「二人とも冒険者になりたいんですが」

ウェーブの掛かった髪にはちきれんばかりの巨乳の姉ちゃんに話しかける。うん、こういう女の絶望する顔が見たい。

「では、手数料をもらいます」

「て、手数料？」

受付の女の言葉に、俺は聞き返してしまった。マジかよ、登録するのに手数料とかいるのかよ・・・

「おいアクア、お前金持ってるか？」

「突然連れてこられたのに持ってきてるわけないでしょ」

アクアの言葉に、俺は特に驚きもしなかった。こいつが使えないということはこのギルドに来るまでに分かっていたことだ。

さてどうするべきかと考えていると、アクアは近くに座っていたプリーストの老人に近づくと

「そこのプリーストよ、貴方の宗派を申し上げなさい！　私はアクア。そう、アクシズ教団が崇めるご神体、女神アクアよ！　汝、もしアクシズ教徒ならば・・・・お金を貸してください」

女神のくせに人間に金を貸してくれとか・・・あ、老人が何か笑いながら話している。それを聞いてアクアは肩を落としてこちらに戻って来ようとすると、老人に呼び止められお金を受け取っていた。老人はまた何か話しているが、それを聞いてアクアはさらに肩を落とした。

「あの人、私の後輩女神の宗教に入ってる人だった・・・私、後輩の宗教の人に情け掛け

られたんですけど・・・・・」
　アクアの顔がこれ以上ないほどに暗くなっている！マジか、こいつにもプライドという物があったんだな・・・・・
「では、お一人手数料１０００エリスになります」
　プリーストの老人から貰ったのは３０００エリス。１エリス１円らしいので２０００円も払わないといけないのか・・・ぼったくりじゃないか？
　受付の女――名札を見ると、ルナという名前らしい――から冒険者カードを受け取り。簡単な説明を受ける俺とアクア。
「では、こちらの水晶に手をかざしてください。そうすれば、こちらのカードに能力などが記載されます」
「おいアクア、お前が先にやれ」
「え？　いいの？」
「俺は後からやるのが好きなんでね」
　結果は見えているので、アクアがどんな能力を持っているのかを知るのが先決だ。使い方によっては、使える手駒になるかもしれんしな。
　水晶にアクアが手をかざすと、水晶から出てきた光がカードに次々に文字を書いてい

く。ほう、ここら辺はファンタジー世界らしいんだな。記載が終わると、ルナが冒険者カードを確認して、眼を見開く。
「は!? はあああああ!? なんですかこの数値！ 知力と幸運は平均以下ですが、それ以外はすべて平均値を大幅に超えています！ これなら、魔法使い職以外はどれにでもなれますよ！」
「ねえねえ、それって私が凄いって意味？」
「そういうことだろ」
ギルド内が驚きの声に包まれる中、アクアが俺に聞いてくる。普通分かることだろうに、それをわざわざ聞いてくるとは、やはりこいつは知力が低いって事か。
「じゃあ次は俺か」
さてさて、一体どんな結果になるかな？水晶に手をかざすと、アクアの時と同じように水晶から出た光がカードにステータスを記載していった。記載が完了すると、俺はルナにカードを渡す。
「これでいいのか？」
「ええ。それにしても、随分長かったですね。普通の人の倍ぐらいの時間がかかってましたよ？」
「どこか調子でも悪いのかしら？」と呟きながら俺のカードに視線を移すルナ。瞬間、ア

クアの時以上に目を見開いたルナは、驚きのあまりカードを投げ飛ばした。
「うおっ！　貴様、俺の持ち物に何をする！」
「す、すみません！　で、でも・・・・」
　投げ飛ばされたカードを何とかキャッチする俺。ルナの尋常ではない反応に、さきほどまで騒いでいたギルドの奴らも静まり返っている。ルナは震える指で俺を指すと、大声で叫んだ。
「貴方、すべてのステータスが最高レベルじゃないですか！　今まで誰一人としていなかった、完全なオールラウンダーの冒険者ですよ！　これなら、魔王だって倒せちゃいますよ！」
　フフフ、ルナの言葉にギルド内は騒然としている。当たり前だ！この暗黒破壊神である俺様が、こんなアクア（バカ）よりも下なはずがあるわけがないだろうが！人間どもよ、この俺の名をしかと刻むが良い！我が名はダークザギ！やがてこの世界を支配する者だ！
「あれ？　水晶がまだ何か書こうとしてますよ」
　ギルド内にいた冒険者の一人が水晶を指さすと、全員の視線がそっちに移った。あ、マジだ。しかも、光の色がステータス記載するときの綺麗な色じゃなくてすごい毒々しい黒色だし。
「ええっと、なんて書いてあるんでしょうか？」

恐る恐るルナが近づいて書かれた文章を見ると、口に出して詠唱し始めた。
「ええっと。ダークザギ、こいつは性格に問題あり過ぎるから絶対に冒険者にするべし。極悪非道、人を人とも思わない、めっちゃクソどす黒いこと考えてるからみんな逃げろ。こいつの正体、別の世界から来た人工せ・・・」
「しょうっら！」
「ひぃ！」
ギリギリのところで水晶に向けてザギ・シュートを放ち、ついでにルナが読んでいた紙も消し飛ばす。あっぶね～危うく俺の正体がバレるところだった。
「あはははは。どうやら、この水晶壊れてたみたいですね。ほら、俺が殴るふりしただけでこんなにボロボロになっちゃいましたし」
「いえ、でも先ほど何か小さな球体が通ったような・・・」
「気のせいですよ！　ねぇ～？」
「ひうっ！　は、はい・・・」
とびっきりの笑顔で迫ると、目元に涙を浮かべながら肯定するルナ。ただの人間が、俺の与えるプレッシャーに耐えられるわけがないだろ。
「それじゃあ、気を取り直して何の職業にし・・・」
ようかな。と言おうとしたところで、俺は自分の冒険者カードの職業の欄をみて言葉

を失った。言語や文字はある程度頭の中に叩き込んだので何が書かれているかは分かる。

職業　冒険者

せ、先手を打たれていた・・・あの水晶め!自分が壊されること分かってて先に職業を決めやがったな!てか、あの水晶どれだけ高性能なんだよ!

「おやおやザギさん、冒険者に強制的にされちゃったみたいね〜!　プークスクスクス!」

あ、アクアに笑われるなんて、屈辱だ!俺はアクアの顔面を思いっきり殴ってやろうとしたが、先程ザギ・シュートを撃った右手が痛すぎて何もできない・・・っ!い、痛いよ〜

俺の名前って、ダサい？　ｂｙダークザギ

　あれからもう数週間ほどが経った。金のない俺とアクアは、このアクセルの土木工事を毎日毎日やりながら少しずつ金を溜めていった。まさかこの俺が、こんな労働をする羽目になろうとは・・・

「なにを泣きそうになっているのよザギ？」

「誰のせいだと思っている誰のせいだと！　お前が女神らしくないから俺までこんな労働する羽目になってるんだろうが！」

　アクアの何も知らない表情がものすごく腹立つ。マジで一発殴ってやりたい。ただ、今の俺は体が恐ろしいほどに弱い。必殺技などは使えるには使えるが、使うと体がものすごく痛くなる。いわゆる、弱体化をしてしまったのだ。

　話を戻すが、はっきり言って今の俺とアクアではこなせるようなクエストがない。力も知力もあるが、体があまりにも弱すぎる俺に、力はあるくせに知力がないから使い物にならないアクア。この二人ではこなせるクエストが本当に見つからない。だからこうして、日々ちまちまと土木工事をして金を稼いでるわけだ。

「はぁ～暗黒破壊神と言われたこの俺が、人間に使われる日が来ようとは・・・」

「さっきから何言ってるのよ。ほら、早く作業を終わらせてクエスト探しに行くわよ」
「へいへい・・・・・・」
ピッケルを振り下ろす俺。今日もまた、出来もしないクエストを探しにギルドへ行くのか・・・・・はぁ～めんどくさい

奇跡だ、すごい奇跡だ。まさか俺たちが受けれるクエストがあっただなんて！ジャイアントトードという、大型のカエルモンスターを５匹討伐するだけという簡単なクエストだ。しかも報酬は十万エリスと破格！これは楽して金儲けができる、と思っていたが・・・
「ひゃあああ！　カエルが！　カエルがあああ！」
前言撤回！このクエストめっちゃ怖い！予想以上にデカいカエルから全速力で逃げてる俺は、このクエストを請け負った自分を殴りたい気分だった。
「プークスクスクス！　やばいチョーウケるんですけどー！　ザギったら、あんな必死に走っちゃって、腹が痛くて死にそー！」
「覚えてろよこのクソ女神！　お前なんか食われちまえばいいのに！」
俺が逃げてる傍らで腹を抱えて大笑いしているアクア。あいつなんかジャイアント

トードに捕食されてしまえ!そんな事より今はこいつから逃げ・・・・・あれ?
「振動が、来ない?」
ジャイアントトードに追いかけられてた時の振動が全く来ない。どっか別の場所に行ったのか?となると一体・・・あっ
「いいザギ、まず帰ったらアクシズ教団に入団しなさい。祈りは一日3回、飯は私が9で貴方がい・・・」
アクアがジャイアントトードに頭から食われて本当に捕食されてる!?
「マジで食われてるんじゃねえよこの駄女神いいいい!」

「つ、疲れた・・・」
「ううぅ・・・ぐすっ」
俺の隣で、粘液まみれで泣き崩れているアクア。結局、アクアを助けるために10分ぐらいジャイアントトードと格闘してしまった。まあ、不幸中の幸いの言うべきか、ジャイアントトードは何かを捕食している間は動くことが一切できないので討伐は何とかできた。てか、粘液まみれのアクアが凄い生臭い。
「なあアクア、このクエストは一旦やめにしよう。見ての通り俺は一匹倒すだけで精一

杯だし、お前は捕食されるだけだし。このメンツじゃ到底このクエストはこなせないぞ」

「そんなわけにはいかないわよ！」

急に立ち上がったアクアに驚いて後ろに倒れる俺。粘液が太陽の光を反射してアクアの顔がよく見えん。

「女神であるこの私が、たかがカエルごときにここまでされて引き下がるわけにはいかないわ！　汚されてしまった私の姿を見られたら、信仰心なんてダダ下がりになっちゃうわよ！　このままカエル相手に引き下がったら、美しくも麗しいアクア様の名の名が廃るわ！」

安心しろアクア、貴様の信仰心など所詮その程度のものだ。カエルに食われる以前に、普通に土木作業をしながら酒を飲んでは吐いて、涎垂らしながら馬小屋で寝てる貴様の姿を知っている俺からしたら今更の事だ。

だが、アクアは何の躊躇もなく近くにいたカエルに向かって全力で走りだした。

「もう勝手にしろ」

半分諦めた声でつぶやくと、案の定ジャイアントトードに捕食されたアクアの叫び声が草原に木霊した。

「というわけで、新しい仲間を募集する紙を貼ってきたわ！」
「へぇ～そうですか～」
　次の日、ギルドの集会所の一角で大声で叫ぶアクアに、俺は適当に返事を返した。あの後、結局また俺がジャイアントトードを討伐することで助けたアクアを引きずってこのアクセルの街に戻ってきた俺たちは、新しいメンバーを募集することにした。だがその募集内容はアクアが「私が決めるのぉー!!」の一点張りだったので任せてみたのだが、酷いものだった。
「さすがに上級職だけっていうのはバカにもほどがあるだろ。あ、すまんお前元からバカだったな」
「なに勝手に私をバカ扱いしてるのよ！　いい、私は水のめが・・・」
　ああめんどくさい話が始まってしまった。アクセルの街は、ゲームで言うところの『始まりの町』みたいなところだ。ある程度のレベルが上がったら、ほとんどの冒険者たちは次の街へと行ってしまうため、ここにいるのは雑魚ばかりだ。しかも、アクアみたいに最初からアークプリーストみたいな上級職になれる奴はほとんどいなく、大体はレベルを上げてから上級職になるため、はっきり言ってこの町にいる上級職の奴はゼロと言っても過言ではない。

「はぁ～このままこの街で一生を過ごすのか～・・・」
　ある意味それもいいかもな。この数週間で、俺は自分が生きていることに感謝をし始めている。このバカ(アクア)と一緒にいると、いかに自分が愚か人生を生きていたのかがわかってきた気がする。だってこいつ、本当に役立たずなんだもん！世界征服とか復讐とか考えてる暇ないもん！
「あのぉ～」
「「ん?」」
　突然声を掛けられて振り返る俺とアクア。そこにいたのは、俺のように禍々しい色ではない綺麗な黒の髪と赤い瞳の眼帯をした魔女っ子。しかもロリっ子だ。見た感じ１３～１４歳ぐらいだが、一体何の用だ?
「上級職の冒険者募集を見てきたのですが、こちらで合っていますか?」
「え、ええ」
　ロリっ子の質問にアクアが答えると、ロリっ子は付けていたマントを翻した。
「わが名はめぐみん！　アークウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法爆裂魔法を操る者！」
「・・・冷やかしに来たんなら帰れ」
「ち、ちがうわい！」

慌てて否定するロリっ子。あぁぁ、なんかすっごい嫌な予感しかしない。
「その赤い瞳、もしかして紅魔族？」
「紅魔族？」
「魔法の扱いに長けた一族の事よ」
「ほぉ～それは期待できるな」
まさかそんな優秀な一族の奴が来るとは、運がこっちに向いてきているのかもしれない
「いかにも！　我の名はめぐみん！　紅魔族随一の魔法使いにして、爆裂魔法を操る者！　我が必殺の魔法は山をも崩し、いわをもくだ、く・・・・・・」
突然倒れこむロリっ子ことめぐみん。
「もう、三日もなにも食べてないのです・・・なにか食べさせてはいただけませんか・・・？」
こいつ、マジで大丈夫なのか？
「まあ食事をとらせるかはお前がこのパーティーに入るかどうか見極めてからだ。それよりお前、その左目の眼帯はなんだ？」
「ふっふっふ、これは我が強大なる魔力を封じ込むためのマジィックアイテェム！　もし封印が解かれることとなれば、この世界に大きな災厄がもたらされるであろう」

「封印みたいなものか？」
「まあ特に意味はありませんが。単にオシャレでつけてるだけ」
　めぐみんの言葉にムカついた俺は、左目の眼帯を引っ張り上げた。
「ああ！　やめっ！　引っ張らないでください！　やめ、やめろぉー！」
　泣き叫べ泣き叫べ！人を馬鹿にした罰だ！
「あのね、その子の一族は生まれつき高い知力と強い魔力を持っていて、大抵は魔法使いのエキスパートで、皆変な名前を持っているわ」
「・・・・・あ、そう」
「ぎゃあああ！　いったいめがぁー！」
　突然手を放したため、眼帯が眼に直撃して悶え苦しむめぐみん。もういいや、なんかこの世界にいると本当にいろいろ疲れてくる。
「変な名前とは失礼な！　私たちからしてみれば、街の人たちの方が変な名前なのですよ？」
「ちなみに両親の名前は？」
「母はゆいゆい！　父はひょいさぶろー！」
　めぐみんが自信満々に叫んだ瞬間、俺とアクアの時間が凍り付いた。こいつ、マジで頭おかしい奴だ！

とりあえず俺は、アクアに聞いてみる。
「こいつの一族は、みんな高い知力を持ってるんだよな？」
「おい！　私の両親の名前について言いたいことがあるなら聞こうじゃないか！　というより、同じ紅魔族である貴方が、なぜそこまで同族嫌悪をするのです？」
「は？　俺が紅魔族？」
なぜ俺が紅魔族に・・・あ、今の俺の瞳の色こいつらと似てる赤い目だったわ。
「そういえば、貴方の名前は何というのですか？」
「俺か？　俺の名前はダークザギ、まあザギと呼んでもらってもいいぞ。あと、この青い髪の女はアクアだ」
「な、なんとおおおおおおおお！」
名乗った瞬間、めぐみんが大声を上げて数歩後ろに下がる。な、なにか変なことしたか？
「ざ、ザギとは・・・・・な、なんてカッコいい名前なんでしょうか!!　そんなカッコいい名前を貰ったとは、貴方の両親は紅魔族の中でも随一のネーミングセンスの持ち主なのですね!!」
「へ？　お、俺の名前が・・・カッコいい・・・？」
「はいっ！」

超笑顔でめぐみんは言ってるが、ちょっと待て。こいつらは皆変な名前を持っている。そして、そんなやつらが凄いカッコいい名前だと言ってくる俺の名前は・・・・・・超ダサいってことじゃん!

「う、うそだあああああああああああああああああああああああ!!!!!」

やっぱりこの世界嫌だあああああああああああああああああああ!

カエルの口のなかって、意外と生暖かいです　ｂｙめぐみん

　再びジャイアントトードの討伐にやってきた俺とアクア。今日は新しく仲間に加わっためぐみんも連れてきたから、前回のようなことにはならないはずだ。めぐみんはアホだが頭は悪くないので、恐らく多種多様な魔法でも使ってくれるだろ。一応アークウィザードなんだし。
「うし、それじゃああそこで寝ているジャイアントトードどもを討伐しますか」
「うおっしゃあああああ！　さあザギ、めぐみん、行くわよ！　女神であるこの私をコケにしたことを後悔させてやるわ！」
　いつも以上に五月蠅いアクアが横で騒いでいる。余程ジャイアントトードに捕食されたことが気に食わなかったのだろう。だがアクア、心配をするな。今日はお前にちゃんと役に立ってもらう。
「ザギザギ」
「ん？　どうかしたかめぐみん」
　不意に袖を引っ張ってくるめぐみん。俺の方が背が高いからめぐみんが見上げる形

になっているが、なんか可愛いなこいつ。
「アクアは先程、女神と言っていましたが、一体何のことなのですか？」
「あいつはただの妄想癖だ。あいつの中では、自分が女神という設定らしい」
「なんと!?　それは、なんとかわいそうな・・・」
「めぐみん、それ完全にブーメランだぞ？　お前もその妄想癖なんだからな？　自分の事を棚に上げるんじゃねえぞ？」
　すかさずめぐみんに突っ込む俺。こいつ、自分が中二病だということ忘れてアクアの事を同情の目で見てやがった。どちらかというとお前の方が相当重傷だぞ。
「なにをしてるのよ二人とも！　早くあのカエルどもを駆逐してやるのよ！」
「まあ落ち着けアクア。今日の主役はお前なんだからな」
　荒ぶるアクアの肩を叩いて落ち着かせる俺。まあこれだけ生きが良いならこっちもやりがいがある。
「へ？　ザギさん、なんか私すご～い嫌な予感がするんだけど・・・」
「そんなこと言うなよアクア～」
「ザギさん、顔が笑ってるけどすごい怖いんですけど？　なんか、私本当に命の危機を感じるんですけど？」
　少しずつ俺から離れようとするアクア。だが、俺はアクアの腕を全力で掴んで逃げら

れないようにする。腕を掴まれたアクアは、顔から大量の汗を流しガクガクと震え始めている。俺の横にいためぐみんも何かを感じ取ったのか、俺から少し離れた場所に逃げてガクガクと震えている。

「それじゃあアクア、囮頼んだぞ？」

「へ？」

「おうりゃ！」

俺は持てる力を全て使って、アクアを欠伸をしているジャイアントトードの口めがけて投げた。

「いやああああああああああ！」

アクアの叫び声が高原に木霊すると同時に、ジャイアントトードの口の中へと吸い込まれていった。まあ消化される前に助け出せば問題ないだろ。俺が消化される前にあいつを助けるかは別の話だが。

とりあえず、ジャイアントトードは何かを口に入れている間は動くことができない。アクアを食ってる間に、俺とめぐみんであのカエルをぶっ潰すという作戦だ。

「涼しい顔をして結構えげつない事をやりますね、貴方」

「ん？　このぐらい別に普通の事だが？」

「・・・・・とりあえず、貴方が凄いゲス野郎だということだけは分かりました」

「それは俺にとっては褒め言葉だな」
俺の行動にめぐみんが引いているが、別にこいつにどう思われようが関係ない。使えるなら使うしそうでないんなら捨てるだけだ。まあそんなことは後で考えるとして、アクアの身を犠牲にした囮作戦が上手くいっているうちにとっととやることはやろう。
ドスン
ん？なにかな今の音は？今、すっごい聞きたくない音が聞こえた気が・・・
「ざ、ザギ・・・」
震えた声でめぐみんが俺の服の裾を引っ張ってくる。やめろめぐみん、俺の嫌な予感が的中するような仕草をするな。俺はゆっくりと、音の聞こえた方向に顔を曲げる。そこにあったのは、明らかに他のジャイアントトードよりもデカいピンク色のジャイアントトードと、２匹のジャイアントトードだった。
「・・・・・さらばだアクア！」
すまないアクア。貴様の囮作戦はどうやら失敗に終わってしまうようだ。精々カエルの胃の中でゆっくりと溶けて死んでくれ。てか、お前の叫び声のせいで出てきたんだから死んで詫びろ。まあ原因は俺だが。あと、化けて出たら二度殺すからな。
「って、あれ？　おいめぐみん！　お前も早く逃げろ！」
なぜか俺の後をついてこず、徐々に近寄ってくるクイーンジャイアントトード（名称

は今俺が付けた）を見据えているめぐみんがいた。いくらあいつがアークウィザードといえど、さすがにあのデカさの敵を相手にするなんて無理があり過ぎる。
「ふっふっふ、我が爆裂魔法の餌食にとって不足なし！　括目せよ、我が最強の必殺技を！」
めぐみんが叫び杖を空に掲げると、その先に黒い光が集まりだした。
「暗黒の彼方より出現せし黒き力よ、我が杖へと宿り、その力で我が敵を全て消滅させよ！」
流石中二病、呪文が中二っぽい。てか、マジでこの魔力の集まりようはヤバい。
「喰らえ、『エクスプロージョン』!!」
めぐみんの杖から放たれた光は一筋の巨大な閃光となり、クイーンジャイアントトードの上空から吸い込まれるように突き刺さった。直撃した瞬間、周りを巻き込む爆風と轟音と共に地面が揺れ、俺は地面へと倒れこんだ。
この威力、マジで洒落にならないぞ！今の俺が喰らったら、確実に死ぬ！現に、喰らったクイーンジャイアントトードはちり一つ残さず消滅してるし。
「いけるぞめぐみん！　お前がいれば、このパーティーでも十分やって・・・」
めぐみんの素晴らしさに褒めようとしためぐみんの方に顔を向けた瞬間、そこにいたのは地面に倒れこんでいるめぐみんだった。

「ふっ、我が奥義である爆裂魔法は、その強大な威力と引き換えに我が魔力を根こそぎ奪ってゆく・・・。要約すると、この魔法使うと魔力全部なくなって動けなくなるので助けてください。久しぶりにモンスター相手に使ったから興奮してこうなること忘れてました。まだ一匹残ってるので早くここから逃げ・・・ぷぎゃっ」

めぐみんの言葉はそこで途切れた。残っていたもう一匹のジャイアントトードに頭から食われたからだ。

結局、残ったジャイアントトードは全部俺が倒しました。

「うっ・・・うぐっ・・・ぐすっ、生臭いよぉ～生臭いよぉ～」

「泣くなアクア、俺が何かされたと勘違いされる」

日も暮れかけの時間。動けないめぐみんを背負いながら、泣きじゃくるアクアと共にアクセルの街にまで帰ってきた俺たち一行。ジャイアントトードの粘液まみれのせいで生臭いが、それ以上に疲れて臭いなんてこの際どうでもよくなっていた。

「カエルの中って、意外と生暖かいのですね・・・」

「そんな知識いらんわ」

どーでもいい知識を話し始めるめぐみん。まあ今回一番の立役者はこいつだから許してやろう。

「めぐみん、今後爆裂魔法は緊急時以外使用禁止だ。動けなくなったらこっちのフォローが大変になる」
「無理です。私、爆裂魔法以外使えませんし」
突然のめぐみんの告白に、俺の足の動きが止まる。こいつ今、『爆裂魔法以外使えない』といったのか？できれば俺の耳がおかしくなっただけだと思いたい。
「・・・・・・マジか？」
「・・・・・・マジです」
こいつ、中二病な上にバカだったのか。やばい目眩が・・・
「ちょ、ちょっと待って！　爆裂魔法は、魔法の中でも特に深い知識が必要な火属性と風属性の複合属性なのよ？　爆裂魔法が習得できるなら、他の魔法だって習得できるはずよ？　それとも、スキルポイントを間違えて爆裂魔法に使っちゃったとか？」
スキルポイント？ああ、確かスキル習得に必要な経験値みたいなものだったな。スキルポイントがないとスキルは習得できないし威力を上げることもできない。ここら辺は本当にゲームみたいな設定だな。ちなみに、アクアは宴会芸スキルとアークプリストの魔法をすべて覚えているらしい。宴会芸がどこで必要なのかはわからないが。
「私は爆裂魔法をこよなく愛するアークウィザード。爆裂系統が好きなのではなく、爆裂魔法が好きなのです！　他の魔法も覚えられないこともないですが、私は爆裂魔法し

か愛せないのです！　なぜなら私は、爆裂魔法を使うためだけに、アークウィザードの道を選んだのですから！」

前言撤回。やっぱこいつ許さねえわ、早急に捨てよう。

「そうか～じゃあ集会所に付いたらお前に報酬はやるからさっさと次の場所へ行け」

めぐみんにさり気なく告げた瞬間

ガシッ

めぐみんが俺の腰に足を回してきた。よくエロいもので見るだいしゅきホールドって奴か？まあこの場合は、捨てられなくない一心からくるホールドなんだろうが。

「私の願いは、爆裂魔法を使うことだけ。報酬はいりません、その代わりに、私をあなた方のパーティーに入れてはくれませんか？　今なら優秀なアークウィザードが、雑費と食費だけで長期契約ができるのですよ～」

もう怪しい会員の勧誘にしか聞こえてこなくなった。てか、本気でこいつ要らない。

「俺たちのパーティーにお前のような優秀なアークウィザードは宝の持ち腐れだから、どっか別のところに行くのをお勧めするわ～」

「いえいえ、貴方も私と同じ、紅魔族の一人ではありませんか！　同じ種族なのですからお願いです、私を捨てようとしないでください！」

「俺はお前たちみたいな変な一族じゃない！　第一、爆裂魔法なんて使用場所が限られ

る上に狭い場所なんかでは使用できないからそうなったらお前本当の役立たずじゃないか！」

必死にめぐみんの俺の肩を掴む手を放そうとしないが、全然離れない。それどころか、粘液のせいで滑って掴むことすらできない。

「もう、どこのパーティーも拾ってくれないのです！　荷物持ちでも、何ならアクアと一緒に貴方の性欲処理でも何でもしますからお願いです、捨てないでください！」

「おまっ！　性欲処理とか、こんな町中で言うんじゃねえ！　てか、さり気なくアクアが性欲処理してるみたいな言い方すんな！　だれがこんな駄女神に欲情するかボケ！」

「誰が駄女神よ！　私は水の女神アクア様よ！　そんな私に欲情するのも失礼だけど、欲情しないのはもっと失礼だわ！」

「一体どっちなのかはっきりしろ！」

「お願いですから捨てないでください！　お願いします、お願いします！」

「うるさいからお前は少し黙ってろ！」

「私の話を聞きなさいよザギ！」

徐々に大きくなっていく俺たちの声に、先程のめぐみんのセリフも災いして周りからの視線が集まってくる。もう嫌だこんなパーティー!!!

結局、最終的には周りの女性陣に誤解を招く言い方をして脅迫をしてきためぐみんを新メンバーとしてパーティーに加入させた俺は、風呂に入っているアクアとめぐみんを待ちながら集会所の待合室でげんなりとしていた。

こっちの世界に来てから、何かと疲れることばかりしか起きていない気がする。窓の鏡に映る俺の顔を見ると、髪の毛はボサボサとしており、目元も隈ができ掛けていた。ちなみに、めぐみんが消し飛ばしたクイーンジャイアントトードはやはりジャイアントトードたちの長だったらしく、あいつが倒れた以上この地域周辺にジャイアントトードが出てくる危険性はなくなったらしい。なので、ギルド本部から相当な金が入ってきたからとりあえずしばらくは安泰だ。

「全く、なんて世界だここは。不死身の自分をこれほどまでに呪う日が来ようとは・・・」

どうせならあのまま地獄に落ちてた方が良かったのかもしれない。アクアとめぐみんのヤバさは正直言ってあの完全生命体のイフよりもヤバい。できればこのまま変な奴が来なければいいのだが・・・

「すまない、ちょっといいだろうか・・・」

また来たあああああああああ！予想してやる、こいつも絶対に碌な奴じゃない。疲れた顔を少しだけ反らして声の主の方を見る。

そこにいたのは、金髪の女騎士だった。

もっと私を嬲ってくれ！　ｂｙダクネス

「君がパーティーメンバーを募集しているという少年か？」
「えっ？　え、ええ一応俺がパーティーの責任者だが」
　話しかけてきた女騎士にたどたどしく答える俺。一応ファーストコンタクトは普通の女だな。だが、ここで油断してはいけない！この世界、どんなことが起きるか全くわからないからな。
「で、では！　まだパーティーメンバーは募集しているということだな！」
　息を荒くして顔を近づけてくる女騎士。近い近い、顔が近い！
「い、一応まだ募集はしてるが、念のために聞くが名前と職業は？　てか、いい加減に顔を近づけるのやめろ」
「はっ！　す、すまなかったな！　私の名前はダクネス、職業はクルセイダーをしている。君のパーティーの募集要項にあった上級職にも当てはまると思うのだが」
「へ、へぇ～そうか～。でも、このパーティーはあまりお勧めしないぞ！　なんたって、役立たずのおバカアークプリーストに爆裂魔法しか使えない頭おかしいアークウィザードに、最弱職の俺しかいないパーティーだ。お前にはもう少しふさわしいパー

ティーがあると思うのだが・・・」

そこまで言うと、女騎士――ダクネスは突然俺の手を握ってくると、再び顔を近づけてきた。

「むしろ好都合だ！　実は私、クルセイダーをしているのだが、その・・・あまり攻撃が当たらなくて、どこのパーティーに行っても門前払いされるのだ。だから、あなた方の様なパーティーならきっと私を受け入れてくれるはず！」

「い、いや・・・攻撃が当たらない剣士は・・・」

「ならば盾代わりとして使ってくれても構わない！　むしろそちらの方が良い！」

顔を紅潮させてるダクネスの顔を見て俺はようやく理解をした。ああなるほど、こいつもアクアやめぐみんと同じ、性能と中身が駄目な奴だったか

カエル討伐、及びダクネスのパーティー参加希望（断った）があった翌日。ギルドの集会場でアクアやめぐみんたちと昼食を取っていた。アクアの方は、花鳥風月というスキルで他の冒険者たちの相手をしている。あいつ、いっつも女神女神とか言ってたくせに完全に芸人に成り下がってやがる。

「そういえば、スキルの習得ってどうすればいいんだ？」

　ふと思った俺は、隣で飯を食っていためぐみんに尋ねる。今までスキルについて考えたことはなかったが、昨日の戦闘と今の俺の弱さを考えれば、スキルを習得しておくのは悪くないことだと思う。なんせ、走ったら六歩でひざを痛める、必殺技を放とうものなら全身筋肉痛で３日は動けなくなる。ここまで弱体化している俺にとっては、スキル習得は今後を生きるためにも必要な事だ。
「スキル習得ですか？　まず、自分が習得したいスキルを他の人に教えてもらうのです。すると冒険者カードのスキルの項目にスキル名が現れます。そのスキル習得に必要なスキルポイントがあれば、習得完了です」
「へぇ～意外に簡単なんだな。となると、その原理で行けば俺も爆裂魔法を覚えられるのか？」
「そうですよザギ！　貴方のような人が憶えるのは、爆裂魔法以外にありません！　さあ今から私が爆裂魔法の神髄を教えてあげますから、一緒に爆裂道を歩みましょう！」
　こいつも顔が近い
「落ち着けロリ。俺は爆裂魔法なんてもの覚える気なんか毛頭ねえんだよ」
「ろ、ロリ・・・？　こ、この我が・・・ロリ・・・」
　めぐみんはダメージを受けた。めぐみんには効果抜群の様だ。
　今度こいつが何かやらかしたら『ロリ』と連呼して精神的に沈黙させてやろう。

「なになに、ザギったら爆裂魔法覚える気なの？　あんな魔法やめといた方が良いわよ。無駄にスキルポイント必要なうえに、習得しても一発しか打てないネタ魔法だから」

宴会芸の披露を終えたアクアがこちらにてくてくと近寄ってきながら言う。あ、やっぱり爆裂魔法ってネタだったのか。隣で一人静かに昼食をとっているめぐみんを横目に、俺はこいつから絶対に爆裂魔法を教わらないと誓う。爆裂厨のこいつの事だ、なにがなんでも俺に爆裂魔法を習得させようとしてこないとも限らないからな。

「そういえば、冒険者ってどんな利点があるんだ？」

めぐみんとは反対方向の椅子に座ったアクアに尋ねる。冒険者と言えば最弱職のイメージしかもっていなかったため碌に調べることもしなかったが、冒険者にしか覚えられないスキルがあるのかもしれない。

「んー利点って言うと、他の職業のスキルも覚えられることかしらね？　でも、所詮それは模倣のようなものでしかないから、本業の人が使うスキルと比べると威力はすんごい弱いわよ」

「ほーつまり雑食ってわけか」

色々と制約はあるが職業に縛られずにスキルを覚えられるのは有難い。何が役に立つかわからないこの世界で生きていくためには一番適してる職業なのかもしれない

「じゃあ何か役に立つスキルでも教えてくれないか？　スキルポイント5しかないから

それなりに消費しないやつ」
「アクアが得意げそうに言うが、もし碌なスキルを教えなかったら後で半殺しにする。
「いい？　まずは右手に布を被せるの」
「こうか？」
　言われたとおりに布を被せる。一体何の意味があるんだ？
「それでね、こう右手を少しずつ揺らしていくと・・・ほら！」
　アクアが右手を数度揺らした瞬間、アクアの右手からハトが何羽も飛び出して来た！
すげっ！これ一体どんな種があるんだ!?
「って、これ宴会芸じゃねえか！」
「痛い！　ちょっとぉ！　この私がせっかく教えてあげたのに、頭を叩くなんてどういうことよ！」
「誰が宴会芸を教えろと言った！　俺は役に立つスキルを教えろと言ったはずだ！　こんな宴会芸どこで役に立つ！」
「それは、クエストで疲れた冒険者たちの前でこれを披露して、多少なりとも心の癒しになればなぁ～なんて」
「お前それ完全に芸人の心得じゃないか！　もうお前今日から宴会芸の女神に改名しろ！」

やはりこの駄女神は、あとで半殺しにして路地裏にでも捨てておいてやる。無駄なスキルを覚えさせられてしまった。
「あっはっはっは！　面白いね君たち！　君たちがダクネスが入りたがっているパーティー？　そこの黒髪の少年、役に立つスキルが欲しいんなら盗賊スキルなんてどう？」
後ろから響く少女の声。ダクネスと言っていることは、昨日の女クルセイダーが仲間を連れて懲りずに来たのだろう。クソっ！昨日ストレートに「いらんっ！」と言ってやったのに、効果がまるでない。いや、あいつがドMだということを考えたらむしろ逆効果だったのか？
後ろを振り返ってみると、そこにいたのは昨日の女クルセイダーダクネスと、頬に切り傷のある身軽そうな服装の銀髪の少女だった。
「おい、昨日包み隠さずに断ったのに、今度は仲間を連れてやってきやがったかドMクルセイダー」
「はうぅっ！　ま、まだ一日しかたっていないのにここまで私をゾクゾクさせてくれるとは・・・ぜひとも、あなたのパーティーに入れてほしい！」
「それを決めるのは後だ。それより、そっちの銀髪の女、盗賊スキルがどうのこうの言っていたが、本当なんだろうな？」

「ホエェ・・・・・・・」
「おい?　どうかしたか?」
　銀髪の少女から返事が来ないというか、心ここに在らずといった感じだ。俺の顔をじっと見たまま動かないし、頬を赤くしてる。風邪でも引いているのだろうか?
「お、おいクリス?　一体どうかしたか?」
「はっ!　ご、ごめんごめんつい・・・」
　少女――クリスはダクネスに肩を揺らされて意識を戻したらしい。なーんか嫌な予感がするが、俺の気のせいだと信じたい。むしろそうでないとそろそろ本気で泣くかもしれない

　クリスとダクネスに連れられて人気のない裏路地まで来た俺は、クリスの言う盗賊スキルについて簡単な説明を受けていた。クリスの職業の盗賊には《敵感知》《潜伏》《罠解除》《窃盗》などの、いわゆる泥棒の使うような技ばかりがあるらしい。まあ、『盗賊』という職業名の時点で薄々感づいてはいたが、こんな少女が盗賊をやっているなどとは一般の奴は夢にも思わないだろうな。
「というわけで、まずは潜伏スキルから教えるわね。ダクネス、ちょっと向こう向いて」

「ん？　向こうか？」
　クリスに言われるまま反対方向を見るダクネス。すると、クリスは近くにあったタルに入り上半身だけを出すと、近くにあった石をダクネスの頭めがけて投げてそのままタルの中に隠れた。
　・・・・・今のが潜伏スキル？
　あっけないスキル教えに唖然とする中、ダクネスは無言でクリスの隠れたタルのそばまで歩いていく。そりゃあそうだわ、だって隠れれるようなタルがあの一個しかないんだもの
「敵感知・・・！　敵感知・・・！　ダクネスのピリピリする殺気を感じるよ！　・・・ねえダクネス、これはあくまでスキルを教えるためだからタルを転がそうとしないで？　お願いしますダクネス様！」
　クリスの悲鳴が聞こえる中、ダクネスは無言でタルを転がしている。
　やっぱこの世界碌な奴がいねぇ・・・・・

「さ、さて！　それじゃあ私がお勧めする一番のスキル、盗賊スキルを教えるよ！」
　ようやくまともなスキルを覚えられそうだ。クリスの説明を簡単にすると、盗賊スキルは相手が身に付けている物ならなんでもランダムに1つ奪えるスキルらしい。ただ

し、奪えるものは完全に幸運度に依存するので、下手をしたらハズレを引くこともあるらしい。
「それじゃあ実践してみるよ！『スティール』！」
クリスが叫ぶと同時に、その右手に小さな袋が握られていた。
「あ、それ俺の財布」
「ふっふっふーどうよ！　これが盗賊スキルのスティール！」
「予想以上に凄い能力だな。うし、習得確定」
とりあえずクリスから教えられたスキルは全部習得しておくことにしておく。アクアの宴会芸なんかよりもよっぽど役に立つ。
「ええっと、《敵感知》1ポイント、《潜伏》1ポイント、《窃盗》1ポイント、《花鳥風月》5ポイント。《花鳥風月》？」
「ああ、それは先程君の仲間の青髪の少女がやっていた宴会芸スキルだよ」
「宴会芸のくせに5ポイント!?　高すぎるだろ！　この世界の価値観は一体どうなってんだよ！」
なんで役立たずな宴会芸が5ポイントもかかるんだよ！これは消しておこう。
習得するスキルを決めた俺は、冒険者カードの習得の項目を押し、スキルを習得する。
んーなんか変わった感じが全然しない。

「これで一応習得は完了したのか？」
「それで大丈夫だよ！　よーしそれじゃあ早速スキルの練習をしてみよう！　敢闘賞は君の財布！　そして辺りは私のこの魔法の掛けられたダガー！　４０万エリスはくだらない一品だよ！　そしてはずれは、さっきダクネスにぶつける為に拾った小石！」
「きったねえぞおい！　てか、財布位返せ！」
「ふっふっふー返してほしければ、私からみごと奪って見なさい！」
やられた。女だと思って油断していたが、こいつの職業は盗賊だ。こうやって人にスキルを教えるついでに相手の有り金全部持っていくことぐらい考えておくべきだった。
まあいい、これもスキル習得のお礼と言うことで流してやる。ただし、そのお礼は１００倍にして返してやるがな！
「行くぜ！　『スティール』ッ！」
俺の右手と左手に布の感触がある。ん？なんで左手にまで？
「い、いいっ！　いやあああああああああ!!」
クリスの叫ぶ声が聞こえる。何事かと思ってクリスの方を見ると、そこにいたのはダガーを取られたわけでもなく、財布を奪い返されたわけでもなく、ましてや石ころを取られたわけでもない、全裸のクリスがいた。えっ!?このスキルって、ランダムに一つのはずだけど、まさか一括りに『服』で盗れたのか!?

「お、お願いだから服を返してぇ～!!」
泣き叫ぶクリス。だが、俺は一つ思った。ここでこいつから服の代金を請求すれば、中古のダガ―を売るよりも金が手に入るんじゃいのか、と。
その考えに至った瞬間、俺は良い笑顔をしてクリスに言った。
「だぁったら、お前の服の価値はお前が決めやがれぇ！　さもないと、この服はこの街にいる変態冒険者に売りつけて、お前を露出癖がある女盗賊としてこの街中にその名を広めるぞぉ！」
「ひうっ！」
「さあどうする！　服を取るか金を取るかどっち！」
「うっ、うぅ・・・・・・・」
泣け！アクアやめぐみんのせいでストレスが溜まりまくってるんだ、一発お前で発散させてもらうおうか！
「な、なんという鬼畜の所業！　やはり私の目に狂いはなかったあああ！」
あ、こいつの存在すっかり忘れてたわ

ようやく私のでば・・・　ｂｙ駄女神

クリスから服と金を不等価交換して財布が潤った俺は、泣きじゃくるクリスと頬を赤らめて息が乱れているダクネスを連れてギルドに戻ってきた。
「おかえりザギ。私の華麗な芸を見ずに一体どこに行ってたのよ？」
「ん？　そちらの女性はなぜ泣いているのですか？」
未だに泣き止まないクリスに興味を抱くアクアとめぐみん。おい、いい加減に泣き止めクリス。
とりあえず適当に誤魔化そうとしたとき、俺よりも先にダクネスの口が開いた。
「うん。実はクリスはザギに覚えたてのスティールで服をはぎ取られた上に、有り金全てと服を交換して、落ち込んでいるところだ」
刹那、ギルド中の空気が凍り付いた。いや、主に凍り付いているのは女性だけで男性からは「よくやった勇者よ！」という羨望を受けている。
「お前の服の価値はお前が決めやがれ」っていうから、持ってるお金とお金になりそうなもの全部渡したけど、パンツだけが返ってこなくて。それで、「パンツも返して」って言ったら、「下着は別料金だ！」って言われて！　返してほしかったら、金を持って来る

か体で払うかどっちかにしろってぇ！」
「待ってくれぇ！　確かにそんなことは言ったが、本当に待ってくれぇええ！　アクアやめぐみんだけじゃなくて、女冒険者に加えて男冒険者までマジで引いてるから！分かった、パンツはただで返すから！　これ以上泣かないでええええ！」
　さっきまで勇者を見る目で見ていた男どもまでマジで引いてやがる！いや、確かにやりすぎだとは思ったが、反応が面白いんだもん！人をいたぶるの久しぶりだから調子に乗り過ぎただけだもん！
「ま、まあザギがやったその悪行については後できっちり始末をつけるとして、無事にスキルは覚えられたのですか？」
「俺後で始末されちゃうのね。おう！　見てろよ、『スティール』ッ！」
　めぐみんに向かって右手を突き出す俺。恐る恐る、クリスみたいな自体にはなりませんようにと祈って閉じていた目を開いて自分の右手を見ると、それはしっかりと握られていた。
　めぐみんの着ているマント以外の全ての服がっ！
「またかよ！」
「いやあああああああああああ！　な、なにをするんですか！　今度は私まで素っ裸にしたのですか！　どんだけ変態なんですか！　ステータスが上がったから、冒険者か

ら鬼畜変態にジョブチェンジですか!?　こんな公衆の面前で服をはぎ取られたら、さすがに私だって恥かしいですよ!」

　その場に蹲ってマントで必死に自分の体を隠しているめぐみん。俺の頭にあるめぐみんの被っていた帽子が、まるで今の俺の心情を察したかのように両目を覆い隠すようにズレ落ちる。さすがにこれは俺も悪いとは思っている。

「あぁあ、なんかすまん」

「だったら一遍死んでください!」

「ふぎょらっ!」

　めぐみんからの全力パンチを喰らった俺は、そのまま空中で数度回転して地面に叩きつけられる。その瞬間俺は見逃さなかった。周りの女性冒険者たちに目つぶしをされる男冒険者どもと、殴られた俺を見て「自分もやってほしい!」と言わんばかりの表情になっているダクネスと、ちゃっかり俺からパンツを取り返してうれし泣きをしているクリスと、こんな状況下で花鳥風月をしているアクアを。

　ああ、なんでこんなことになっちゃったんだろ?

「ちょっと、この方クルセイダーじゃないですか!?　断る理由なんてないんじゃないで

すか？」

顔面に包帯を巻いている俺をしりめに、ダクネスの冒険者カードを見て驚いているめぐみん。

ちなみに、めぐみんの裸は女性冒険者たちの必死の目つぶしによって、俺以外の男冒険者には見られていないらしい。ていうか、めぐみんのパンチ凄い痛かった。もうノアなんて目じゃないぐらいまでに痛かった。俺が弱体化しているのもあるが。

アクアとめぐみんにはダクネスを会わせないようにしてたつもりだったんだけどな～仕方がない。

「実はだなダクネス、俺とアクアはガチで魔王を倒そうと思っている」

「え？　そんな話私は一言も聞いていないのですが・・・」

めぐみんが何か言ってるが気にしない。まあそんな事一言も説明してないし、なんなら今決めた事だ。アクア曰く魔王討伐をしない限りこいつは天界とやらに帰れないらしい。それを聞いた俺はダクネスのパーティー参加を阻止するためにその話を利用させてもらった。魔王討伐となれば流石にダクネスも諦めざるを得ないだろう。

「いい機会だからめぐみんも聞いてくれ。別に俺はそんな義務ないんだが、アクアには魔王を討伐する必要がある。そのために冒険者にもなった。だから、俺らから離れるなら今の内だぜ？　魔王どころか、魔王軍の幹部と戦ったら今の俺たちじゃただじゃすま

ない。特にダクネスは女騎士、捕まったらエロい事になること間違いなしだ」
「ああ全くその通りだ！　昔から、魔王やその手下どもにエロい目にあわされるというのは女騎士の役目だからな！　だが、それでも行く価値はある！」
「え？　あれ？」
「ん？　なにか私は変な事でも言ったか？」
　変な事しか言ってないからこんな反応してるんだよ。逆にお前はなんでそんな自分が普通かのような反応してるんだよ。
「なあめぐみん、これはお前にも言えることなんだ。お前みたいな爆裂魔法しか使えないやつが魔王軍にかなうわけがない。だから、お前がここに残る必要はないんだぞ？」
　俺の言葉を聞いた瞬間、めぐみんは片足をテーブルの上に置いて妙にカッコいいポーズを決めて叫んだ。
「我が名はめぐみん！　紅魔族随一の魔法使いにして、爆裂魔法を操りし者！　我を差し置き最強を名乗る魔王！　そんな輩、我が最強の爆裂魔法で消し飛ばしてしんぜよう！」
　ああ駄目だ。このバカ二人の説得はもう無理だ。
「そういえばクリスはどうする？」
　なんとなくダクネスとめぐみんに挟まれているクリスに話を振る。別にこいつは

パーティーに入りたいとは言っていなかったし、恐らく大丈夫だろうが一応聞いてみる。
「私？　私は他にもやることがいっぱいあるから無理だけど、たまーにならザギ様の手伝いは出来るよ？」
「そうかそうかそうだよな。やっぱり無理だ・・・・ん？　てか、ザギ様？」
　色々と突っ込む点があるが、まず俺が気になったのはこいつの「ザギ様」という呼び名だ。俺、こいつには嫌われるようなことしかしてないんだが。
「なんでザギ様？　俺、お前にそんな呼び方されるようなことしたっけ？」
「え？　だって、ザギ様はザギ様でしょ？」
　何かおかしいところある？とでも言いたそうな表情で首をかしげるクリス。この件についてはこれ以上踏み込まないようにしよう。踏み込んだらいけない世界を垣間見てしまった。
「じゃ、じゃあ次の質問だ。お前、本気か？　相手は魔王軍だぞ？」
「うん。だって私、あいつら全員消滅すればいいって思ってるし！」
　うわっめっちゃいい笑顔。この嘘偽りない顔で結構えげつないこと言ってる辺り、ガチなんだなと思ってしまう。この子、見た目に反して結構残忍な子！
「ね、ねえザギ、ザギ・・・」

隣にいたアクアが何か言いたそうに裾を引っ張ってくる。
「なんかさっきから話を聞いてると、私腰が引けてきたんですけど。なんかこう、どっかの配管工さんみたいな楽しい魔王討伐とかできないの？」
「お前がキノコを食って大きくなったり溶岩に落ちてもお尻が火傷する程度ですむんならそれでもいいが。てか、お前が一番の関係者なんだから一番意欲を見せろ！」
こいつは本当に一発殴ってやりたい。いや、今日中に絶対に殴る。
その時
『緊急クエスト！　緊急クエスト！　街にいる冒険者たちは至急ギルドに集まってください！　繰り返します！　街にいる冒険者たちは至急ギルドに集まってください！』
街中にアナウンスが響き渡る。それを聞いた冒険者たちは、まるで今まで休めていた牙を研ぎ澄ますかの如く、気合を入れ始めている。
「な、なあ。緊急クエストって言ってるけど、一体なにが始まるんだ？　魔王軍が攻めてきたのか？」
横にいるめぐみんたちに問いかける。何が起こっているのか理解できず不安になる俺とは対照的に、めぐみんたちは嬉々としている。
「なにを言っているんだザギ。キャベツの収穫に決まっているだろ？」
・・・・・・・・・はい？

「ちょっと待て。天才的な頭脳を持つ俺でもさすがに話の意図が全く分からない。キャベツが何だ？」
「だからキャベツの収穫ですよ」
「あの緑で丸っこいキャベツ？」
「それ以外にキャベツなどありますか？　一玉１万エリスでギルドがお金をくれますから、財布の中が乏しい冒険者たちにはうれしいクエストのはずですからてっきりザギは知っている物かと」
「１万⁉　あのキャベツが⁉」
　もう本当にこの世界の感覚が分からなくなってきた。花鳥風月なんて宴会芸が盗賊スキルよりも習得のために必要なポイントが高く、今度はキャベツが一玉１万ときた。はっはっは、笑いが止まらねえぜ。
「ザギは知らない様だから教えてあげるけど、この世界のキャベツは飛ぶわよ？」
「あ、そう・・・・・」
　もうここまで来たら俺は何にもツッコミはしない。アクアが熱くキャベツについて語り、他の冒険者たちがキャベツと死闘を繰り広げている中、俺は少し昔の事を思い出していた。
　俺とノアとのあの死闘は何だったのだろう？

なんだかもう、あの時の事がバカバカしく思えてきた。キャベツ相手に全力で戦っている冒険者たち。大量のキャベツの大群に爆裂魔法を放つめぐみん。キャベツの体当たりと爆裂魔法の直撃を喰らって喜んでいるダクネス。花鳥風月で水を配っているアクア。スティールでキャベツを取っているクリス。

もう、何もかもが出鱈目で、バカバカしくて、アホらしくて、精神的な限界が来そうだ。

なら、もういいじゃないか。

「こうなったらお前らのキャベツ全部奪い取ってやるうううううううう!!!」

おお神よ。できればこのキャベツ狩りが終わった時に、すべてが夢であらんことを祈る・・・・・・

キャベツ狩りが終わり、ギルド内で宴会が行われている。結局、全部現実でした（泣）

「なにが悲しくて野菜炒めなんか食ってるんだ俺は・・・・・」

キャベツ狩りによって大量に出されているキャベツ料理を食していく。美味い。焼き加減と言い調味料の使い方といい、まさに完璧だ。だが、なぜだろう。無性に悲しくなってる自分がいる気がする。

「それにしても、ザギのあの狂った獣のような強攻手段には驚きました」
「そうそう。ザギったらスティール使いまくって、他の冒険者が捕まえたキャベツまで取っちゃったんだもの」
「それで他の冒険者たちから苦情が来たら「文句があるならかかってこいや！」と言って殴り合いになって、挑んできた冒険者全員をズタボロにしてついでにキャベツまで奪うんだからな」
「その代わりに両腕両足を粉砕骨折して、アクアさんに治癒魔法をかけてもらうまでずっと「痛いよ～」って泣いてましたもんねザギ様」
「うっさい！」
　野菜炒めを乱暴に口の中に入れる。だいたい、俺があんな愚行に走った原因の８割はお前らだっつうの。まあ、金目当てっていうのもあったけどさ。
「ザギ、私の名においてあなたに【狂犬のキャベツ狩り人】の称号を与えるわ！」
「そんな称号いらん！」
　なにが悲しくて【狂犬のキャベツ狩り人】なんて称号貰わなあかん！俺は【邪悪なる暗黒破壊神】っていうちゃんとした称号を持ってるんだよ！
　あ、そういえば肝心なこと忘れてた。
「では自己紹介をさせてもらう。私の名はダクネス、一応職業はクルセイダーで両手剣

も持ってはいるが、不器用だから攻撃面では期待しないでくれ。だが、盾になるのならどんどん使ってくれ！」

「私の名前はクリス！　職業は盗賊、いろいろと用事があるから顔を出せるかどうかは分からないけど、一応私もザギ様のいるパーティーの一員ということで！」

そう、新しい仲間が二人も入ってしまった。

絶対に混ぜたらいけないやつらが混ざり合ってしまったのだ。もうだめだ、本当に精神的に壊れそう。

「それにしても凄いメンバーの完成ね！　これなら私たち、本当に魔王を倒せそうな気がしてきたわ！」

すごくテンションが上がっているところ申し訳ないがアクア、魔王倒す以前にこのパーティーの重大な欠点に気付いてくれ。

バカでアホのアークプリーストのアクア。

爆裂魔法しか使えないアークウィザードのめぐみん。

不器用でドＭで盾にしか使えないクルセイダーのダクネス。

妙に武者震いする視線を俺に向けてくる盗賊のクリス。

このパーティー、碌な奴が誰一人としていないんだよ！頼むからもう一回パーティーのメンバー考え直そうよ！

初めてまともな奴に遭遇　ｂｙダークザギ

キャベツ狩りをしたから、冒険者レベルが３つも上がった。ついでに金もたんまり入ったから、思い切って服と武器を買ってみた。

ちなみにコーディネーターはアクア、めぐみん、ダクネス、クリスの４人だ。いろいろな店を回った結果、腕に赤いラインが入った黒の服に、なんかマントみたいなやつが腰についてるズボンを買わされた。ちなみにこのセンスは言わずともめぐみんのだ。他の３人が比較的まともな物を選ぶ中、こいつだけは異常なまでにこの格好を俺に勧めてきた。しかもそれを拒否したら、「ふっふっふ、我の願いが聞けぬというのなら、ここで我が爆裂魔法の餌食になってもらおうか！」と、店中で爆裂魔法を撃とうとしてきたから買う羽目になった。

「意外に似合っているじゃないザギ」

「ふっ、やはり我のコーディネイトは完璧であったか」

「うん、丁度黒と赤でザギのイメージにピッタリだ」

「キャー！　ザギ様カッコいい！」

「恥ずかしいから黙っててくれ」

なぜ俺がこんな中二チックな格好をしなければならない。しかも、赤い目にダサい名前（俺はまだ認めてない）と来てこの格好。完全にめぐみんの一族と同じじゃないか。胃が痛くなってきたよ・・・

「それで、ザギの武器は一体何なのよ？」

アクアが聞いてくる。さすがに武器は他人に選ばせるわけにもいかないので、後日個人的にいろいろな店を回って探して来た。今の俺は力が本当に弱い。今でさえ何もないところで転んでは足を捻挫する。そんな俺に最適な武器はただ一つ。そう、一撃必殺の武器だ！

「というわけであれを買ってきた」

買ってきた武器を置いてある場所を指し示すと、アクア達はそちらの方に顔を向ける。そして置いてあるそれを見た瞬間、ギルド内に驚きの声が響き渡る。

「「「えええええええええええええええええええええええええええ！！！！！！」」」

「うるっせえな」

「いや、アンタなんて物買ってきてるのよ！」

「そもそもあんな物どこに売っていたのですか!?」

「あれを持ち歩いていたら、確実に捕まるぞ!?」

「本当にあれでいいんですか!?」

失礼な奴らだ。まあ確かに、物騒過ぎて周りの冒険者たちも引いてはいるが。

「どこに行ったらあんなメイスなんて売ってるのよ!?」

アクアが叫ぶ。そう、俺が買ってきたのは相当デカいメイス。しかも大きさ的には俺の身長よりもデカいやつ。たまたま迷い込んだ路地裏にある変な魔道具店に置いてあった奴を、店長に話を付けて半額にして買った奴だ。４枚の薄いパーツが十字に配置されてあって、一撃で相手を潰して内部を抉ることが出来る優れものらしい。しかもこのメイス、魔法耐性まで付いてるからあらゆる魔法を無効化することもできるらしい。まあその場合、使う人の幸運度が高くないと逆に受けるダメージが倍になるなんとも博打めいた武器だが、俺にその心配はない。

「まあこれで、俺の装備はすべて揃った。よし、それじゃあクエストに行くぞ！　あっ」

メイスの柄を持って、クエストに向かおうとした瞬間、足を挫いてその場に倒れてしまう。

頼む、お願いだからこの静寂は止めてくれ。せめて笑うなりなんなりリアクションをしてくれ！

「さむっ」

時刻はすでに深夜を回ったころ。俺はそんなことをつぶやいた。俺たちは今、ゾンビメーカーを討伐するというクエストのために墓地に来ていた。ちなみにクリスはいない。なんでも別件があるとかで、しばらくはこちらに顔を出せないらしい。むしろ一生出さなくていい

「その背中に背負っているメイス、やはり邪魔ではないですか？　すごく目立っている気がするのですが」

「便利だからいいんだよ」

「そうですか？　それにしてもそのメイス、どこかで見たような気が・・・」

ジーっと俺の背負っているメイスを睨んでくるめぐみん。こいつの事だから、どっかの雑誌で見た「カッコいい武器ベスト１０！」みたいなやつで見たことあるとかそういうオチだろうな。

・・・・・ん？誰か来た

「お前ら隠れろ。誰か来たぞ」

発動していた敵感知に何かが引っ掛かった。数は・・・・４体ぐらいか。ゾンビメーカーの取り巻きは多くても3体ぐらいだと聞いていたが、まあ1体増えたところで問題はない。

息を殺して先陣を切ろうとしたその時、青白い光が墓地の中心に走る。

「なんだ？　ゾンビメーカーって電撃の攻撃でもするのか？」
「いえ、そんなことは無いはずなのですが・・・」
「攻撃というより、これはただの魔法陣だな」
　めぐみんとダクネスと一緒に現れた奴の動きを観察する。こういう時に大切なのは、考えて行動することだ。
　改めて魔法陣を発動したやつを見ると、黒いローブを着た女性だった。なぜ女性と分かったかというと、着ているローブの上からもわかる豊満なメロンが二つもあったからだ。
　というか、あのローブどっかで見た気が・・・
「あ――――――――っ!!」
　急にアクアが騒ぎ出したかと思うと、その場から飛び出て黒いローブの女目掛けて走っていく。
　あのバカっ！余計なことしやがって！
「覚悟しなさいクソリッチー!!」
　アクアの言ったリッチーとは。
　アンデットの最高峰の一つであり、別名ノーライフキングなどとも呼ばれている。元は大魔法使いの人間が、人の肉体を捨て去ることによって誕生するらしい。

「や、やめてくださいいいいい！　いきなり現れて、なぜ私の魔法陣を消そうとするのですかあああああ！」
「黙りなさいクソアンデット！　こんな魔方陣使って、どうせよからぬことでもしようとしてたんでしょ！　こんな物、こんな物！」
　全力で足で魔法陣を消していくアクアの腰に泣きつくリッチー。というか、この声どっかで・・・・・あっ！
「お前もしかして、俺にメイス売った魔道具店の店主のウィズか!?」
「え？　あ――――――っ！　そういうあなたは、無理矢理半額にさせたザギさん！」
　マジかよ、ウィズがアンデットだったとは。というか、無理矢理半額にさせたことバラすなよ。おかげでめぐみんとダクネスからの視線が冷たいものに変わっちまったじゃねえか。あと、アクアはいい加減魔法陣踏みつぶすのやめろ。

　あの後、荒ぶるアクアを物理的に黙らせて、ウィズの営んでいる魔道具店で休息をとることになった俺たち一行。出してもらったお茶と菓子を食いながらウィズがなぜあの墓地に言っていたのか理由を聞いた。
「なるほどなるほど、つまりウィズは夜な夜なあの墓地に行って葬儀も碌にされなかった魂たちをあの世に送っていると」

「はい。ただの自己満足だとは思うのですが、亡くなられた方たちがあまりにも不憫で・・・」

悲しそうな顔をして俯くウィズ。ふむふむ、つまり俺たちは（というよりアクアが）その魂たちの成仏を邪魔してしまったと。

「よしアクア、この責任お前が取れ」

「ぶえっ！　ばんでばだじがっ！」

「食うか喋るかどっちにせい！」

「なんで女神な私がリッチーの出したお菓子なんて食べなきゃいけないよの！」なんて偉そうに言ってたくせに、こいつもりもりと食いやがって。

「んぐっ。なんで私がそんなことしなきゃいけないのよ！」

「元はと言えばお前が勝手に突っ込んだのがいけないんだろうが！　睡眠時間削って少しでも魂に詫びて来い！」

「珍しいですね。ザギがそんな事言うなんて」

「本当だな。てっきりお前の事だから「それがどうした？魂がどうなろうが俺には関係ねえ」と切り捨てると思ったのだが」

「お前たちの中の俺の評価は一体どうなってんだよ。いや否定はしないが」

「いやそこは否定してくださいよ！」

めぐみんのツッコミがはいる。いやだって、実際俺そういう性格だし。この店にはメイス半額にしてもらった恩があるし、取り敢えず詫びないといけないなーなーんて思ってるわけですよ。

そしてなにより・・・・・・

「ようやくまともな奴に会えたんだ！　これからも仲良くしたい」

「ちょっと待ちなさいザギ！　その言い方だと、清く美しく気高いこの私がめぐみんと同じ頭おかしい子って聞こえるんですけど!?」

「なんですと！　アクア、貴女爆裂魔法をバカにする次に言ってはならないことを言いましたね！　私はこれでも、紅魔族の里では秀才だったんですよ!?」

「わ、私は罵倒されるのは構わないぞ！　むしろもっと罵倒してくりぇえ！」

「ええい、貴様ら黙らんかい！　そんなんだから頭おかしいって言われるんだよ！」

「なによこの虚弱体質！」

「まともに走れない、直ぐに骨折する、なにより性格がねじ曲がってる貴方だけには言われたくありません！」

「なあザギ、頼むからもっと私をいじめてくれ！　それとも、これが放置プレイという物なのか!?」

「言いやがったなアクア、めぐみん！　ようし表に出やがれ！　一生俺に口答えできな

いようにしてやる！」
「望むところよこのクソニート！　返り討ちにしてやるわ！」
「我が最強の爆裂魔法を受けて、その減らず口が叩けますか？　一瞬でケリを付けます」
「はあああ!!　これが放置プレイという物なのだな！　今までにはない快感が・・・っ！」
　このクソ女どもめ！今日こそ自分の立場っていう物を叩き込んでやる！あとアクア、クソニートって言ったこと絶対に忘れないからな。別枠で鉄拳制裁喰らわせてやるからな。
「あ、あのぉーもう夜も遅いので、今日は家に泊まっていきませんか・・・・・？」
　そんなウィズの心温かい提案も「勝った奴が店の中で寝て負けた奴は外で寝る」という勝負に変わり、俺たちのバトルは繰り広げられた。勝敗はどうなったかって？俺の一人負けだよチクショウ！

２人は爆裂道共同体！　ｂｙめぐみん

○月○日
今日もめぐみんと爆裂魔法を撃ちに行った。
背負った時のめぐみんの胸の感触サイコー
○月△日
今日もめぐみんと爆裂魔法を撃ちに行った
背負うときにめぐみんの服の隙間から胸が見えて興奮
○月□日
今日もめぐみんと爆裂魔法を撃ちに行った。
背負った時に体を揺らして胸の感触を味わった。マジサイコー
○月☆日
今日もめぐみんと爆裂魔法を撃ちに行った。
最近胸の大きくなる体操をしているらしいが全く効果がなくいつも通りの胸だった。
○月▽日
今日もめぐみんと爆裂魔法を撃ちに行った。

気付かれずに太ももを触る技能を身に付けこれからが楽しみ

「○月★日、今日もめぐみんと爆裂魔法を撃ちに行った。素晴らしい事に尻を鷲掴みにできた。もう俺このままめぐみんの護送役でいいや」

最近の俺は日記をつけ始めた。勿論これはアクアにも読めないウルトラ文字で書いてるのでこういう事を書いていようがバレることは一切ない。

ここ最近、少し離れた森で見つけた廃城に毎日のようにめぐみんと爆裂魔法を撃ちに行っている。とは言っても、俺は１発撃てば倒れてしまうめぐみんを背負ってアクセルまで戻ってくるというタクシー的な役割だ。最初は嫌々やっていたが、ここ最近めぐみんの体に触れるのが楽しくなってきてしまい、試行錯誤を繰り返し胸の感触や太ももの感触を堪能しまくっている。ああ、まさしくここが俺の楽園（パラダイス）

「んなわけあるかあああああああああ!!!」

付けていた日記を破り捨てる。何をやっているんだ俺！めぐみんはまだ１４歳のガキだ！そんなガキの胸や太ももの感触に満足してる俺って完全に性犯罪者じゃないか！暗黒破壊神と言われた過去を思い出せオレ！思い出すんだ！

「ザギー今日も爆裂魔法を撃ちに行くのでついてきてくれませんか～？」

「はーい喜んでー」

思い出さなくていいや！

「だぁー疲れたー」
「お疲れ様です、ザギ」
「大変だったな」
　ギルドのテーブルに突っ伏す俺に優しく声をかけてくれるめぐみんと、さり気なくシュワシュワを置いてくれるダクネス。うう、優しさが目に染みるぜ・・・！あ、ちなみにアクアは特に何もせず自分だけ先にシュワシュワ飲んでる。後でこいつの財布から5千エリス抜いておいてやる。
「バイトがキツイ。流石にチマチマとクエストこなしてるだけじゃ限界があるな」
　今俺は財政難に陥っていた。前回のキャベツ狩りで得た報酬は装備に消え、残ってた金はこのアクア（バカ）の作った損害でパーになった。こいつ、売り物で宴会芸をやって人を集めたのはいいが、調子にのって色々と消していって、「消したやつを出せ」と言ったら、「消しちゃったものを出せるわけないでしょ」と、タネも仕掛けもない宴会芸をやって本当にアホな事をやらかしやがった。どうやったら掌サイズのハンカチで５０房はあったバナナが消えるんだよ！
　というわけで、こうして今日も今日とてろくな稼ぎにもならないバイトをやっているのだ。うん、一体どうしてこうなってる？

『緊急！　緊急！　全冒険者の方は武装をして、大至急街の門に集まって戦闘態勢のまま待機してください！』

街中から聞こえてくる警音。全冒険者って事は、一応俺やアクア達も含まれている。またキャベツ狩りかと思ったが、周りの冒険者たちも困惑しているあたり本当に緊急事態なのだろう。

取り敢えず言われるがままにメイスを背負って街の門までやってくる。すでに街にいる冒険者のほとんどが集まっていた。そして、全員の視線の先にいるのは

「デュラハンか」

黒い甲冑を着てフルフェイスの兜をかぶった首を持っている首なし騎士のデュラハン。ウィズ曰く、デュラハンは元が騎士のため剣術にも長けているうえに、死の宣告で相手を呪い殺すこともできるかなり上位の強さを持つアンデット。

「俺はつい先日、この近くの城に越して来た魔王軍幹部の者だが・・・」

プルプルと体を震わせ、デュラハンは叫ぶ

「まままままま、毎日毎日毎日毎日っ！　俺の城に爆裂魔法をポンポンポンポンポン撃ち込んでくる、ああ、頭のかしい大馬鹿は、誰だあああああ!!!」

思いっきり俺たちが原因だった

何かおかしいとは思ってたんだよ。毎日毎日めぐみんの爆裂魔法を受けて、壊れるど

ころか逆に直っていくあの城。誰か住んでるとは思ったが、魔王軍の幹部様でしたか。そうですかそうですか。

『爆裂魔法』という単語で周りの注目がめぐみんに集まっている今がチャンス。俺は一歩引きさがり、フードを深く被って潜伏スキルでその場から退散しようとする。許せ皆の者、俺は自分の安泰のために貴様らを犠牲にする

「ちょっと待てそこの全身真っ黒のでっかい武器を背負った貴様」

あれー俺以外に全身真っ黒のでっかい武器なんて背負った奴いたんだ。ご愁傷様ご愁傷様

「なに他人事みたいに聞き流して逃げようとしてるんだよ！　お前だよお前！　そこのフード深く被って今にも逃げようとしているお前！」

ですよねー俺しかいませんよねそんなやつ。

「貴様、確かそこの紅魔のガキと一緒に来てたやつだな？」

「あれ、なんか俺だけ素性バレちゃってる？」

おかしい。このデュラハンめぐみんの事はわかってなかったのに、なんで一緒にいたのが俺だってわかったんだ

「貴様、そのようなオーラを放ってよくバレてないと思っていたな。貴様からはドス黒く、そして底知れぬ闇を感じるぞ」

デュラハンは俺を指さして言った。まあ、俺今までそういうことやってきてましたし、別に今更なんだけど。
「お前のそのオーラ、魔王様以上に恐ろしいものだ。貴様、目が紅いがひょっとして紅魔族か？」
「断じて違う！　こいつみたいな頭おかしいロリの一族と同じ部類に入れるな！」
「なっ！　誰が頭おかしいロリですか！　いいでしょう、今日はまだ一度も爆裂魔法を撃っていません。ザギ、貴方に一発ぶちかましてやります！」
「ふざけろロリっ子！　丁度いい、一発やってやろうじゃないか！」
「お、おーい・・・」
デュラハンが何か言ってるが、それどころじゃねえ！今まで散々こいつの体を堪能してきたが、それとこれとは別問題だ！丁度いい、今までこいつにかけられた迷惑をここで晴らしてやる！
「おい貴様ら、俺を無視するな！」
「うっさい黙ってろ首なし！」
「き、貴様らー！　俺は首なしじゃなくてデュラハンのベルディアだ！　お前ら、今自分たちがどういう状況なのか、本当の分かってるのか!?」
あーだこーだーべちゃくちゃべちゃくちゃほにゃらぺっぺっぺー

めぐみんと言い争っている間、首なしのベルディアは放置されていた。そして放置されてるベルディアを見てダクネスが羨ましそうな顔をしてるのが視界に入ってくるが、別にどうでもいいや。

「ええいいい加減にしろ！　汝に死の宣告を！　貴様は1週間後に死ぬであろう！」

ベルディアが死の宣告を発動する。その対象になったのは・・・俺だった。

「ザギ！」

めぐみんが叫ぶ。他の冒険者たちも悲鳴を上げたりと、どうやら色々めんどくさい事になったらしい。

「その死の宣告は今はまだ何ともない。だが、結束力の高い貴様ら冒険者にとって仲間が徐々に苦しんでいく姿を見るのは耐えられないだろう。紅魔族の娘よ、そこの男は貴様のせいで死ぬのだ。貴様が爆裂魔法を放ち続けたせいでな！」

「はっ・・」

ベルディアに言われ、めぐみんが俺の方に顔を向ける。その表情は、焦りと後悔が混ざったようだった。

「紅魔族の娘よ、その男に掛けられ呪いを解いてほしくば、一人で我が城に来るが良い！

まあ、貴様にその勇気があればだがな？　クハハハハハ、ハッハッハッハ!!」

ベルディアは高笑いをしながら、その場から去っていく。

さてさてさーて、一体どうしたものやら
何かないか考えてると、横にいやめぐみんが立ち上がる。
「お、おいめぐみん。一体何をしに行く気だ？」
ダクネスが聞くと、めぐみんに小刻みに震える体を抑えるように両手で抱きしめると、叫ぶ。
「我が名はめぐみん！　紅魔族随一の魔法使いにして、爆裂魔法を操る者！　我が仲間に手を出し報いを、あの首なしに思い知らせてやります！」
「まさか貴様、一人で城に行く気か!?」
「ダクネス、私はザギにいろいろと恩を感じています。どこのパーティーも、私が爆裂魔法しか使えないと知るとすぐに追い出しましたが、ザギは未だに私をパーティーに入れてくれています。だから、ここは私が行かないと・・・・・」
ついに我慢しきれなくなっためぐみんは、涙を流し始めた。
いや、別にこういう雰囲気になるのは構わないんだけどさ。俺が城に爆裂魔法撃った帰り道にしたこと考えると良心が痛むんだが・・・あ、俺に良心なんてなかったわ
「まあ安心しろよ、別にこんな呪いどうってことないし」
「ザギ、強がらなくていいのです。アンデットの呪いは、どんな強力なアークプリーストでも解けないほど強力なのです。以前里で教わったのですが、アンデットの呪いを解く

方法は掛けた本人が呪いを解くか、神様レベルの強い力を持つ者でないと死ぬしかないのです」

「ふーん」

神様レベルね～・・・めぐみん、ダクネス、あとついでにアクア。貴様たちは知らないだろうが、俺はかつて暗黒破壊神と呼ばれたほどの実力者なのだ。そして、俺は全宇宙の神（と言われてるかは知らない）のウルトラマンノアのコピー態だ。つまり

パチンッ

指を鳴らした瞬間、俺の体から呪いが消え去る。

あまりにも衝撃過ぎるその光景に、一同は度肝を抜かれていた。

「よし、それじゃあ帰るぞ」

そういって俺はめぐみんやダクネスと一緒に街へ戻ると、それを追うかのように、他の冒険者たちも何事もなかったように振る舞い、いつもの騒がしい日常に戻っていった。

ただその場に、俺の呪いを解除しようとした瞬間お役御免となったアクアを残して

「私の出番これだけえええええええええええええ!?」

はい、お前の出番これだけ

こ、これぞ私の求めていたお仕置き！　ｂｙダクネス

生活をするにおいて大切な物とは何だろうか。衣食住という言葉がある。人が生活するためには、自身の体を守る衣類が必要である。日々の活力となる食事が必要である。自然から身を守り、安息の地となる住居が必要である。だが、この３つすべてを満たすために必要なものがこの世にはある。

「金がない!!!」

ギルドの集会所で、俺はそう叫んだ。

今俺とアクアは、相当な金銭難に陥っている。それもこれも、この駄女神が無駄にギャンブルに手を出して、無駄に借金を増やして、無駄にその返済を俺の財布でやっているからだ。こいつ本当に使えない。

「毎日毎日、商店街のコロッケ売りのアルバイトをして、売り上げたと思ったらアクアが売れ残して、バイト料から残ったコロッケ分差し引かれ、そして無駄にアクアがギャンブルに手を出して金が溜まらない負のスパイラル。もういやだよこんな生活！」

「おおザギ、泣かないでください。よしよし」

「本当に大丈夫か？　なんだか最初に会った時よりもやせ細って白髪が増えてるぞ」

慰めてくれるめぐみんとダクネス。そして当の本人のアクアは何も言わずに視線をそらしている！法がなければこいつを殺してやる！法があっても殺してやる！もうなんでこいつと一緒にこの世界に来ちゃったんだろ俺

「いや、あのですねザギさん。私も悪いとは思ってるんですよ。ギャンブルのお金が足りないとき、ザギさんの財布からお金ちょおーっとお借りしてそれを黙ってたり、ザギさんのお財布のお金使って私だけ良い物食べたり、エトセトラエトセトラ・・・」

「お前！　最近財布の金の減りが激しいと思ったら、勝手に使ってたのか！　この犯罪者めええええ！」

問答無用でアクアの襟をつかんで持ち上げる。もうこいつだけは絶対に殺す。誰が何と言おうと殺す！

「だってだってぇーー！　ザギさんが「犯罪はバレるから犯罪になる。だったらバレなきゃ問題ねえ！」って言って、他の冒険者から金盗んでたりしてるの聞いたから、私も実行しただけなんだもん！」

「俺の言葉を鵜呑みにするなあああ!!　大体お前、女神なんだから善悪の判断ぐらいつけろおおおお！」

「ザギさんといたら善悪の判断なんてつかないんだもん！　全部善にしちゃうんだもん！」

俺のせいかあああ!!今の状況全部俺の行動が招いた結果かあああ!!
なんてことだ。まさかここにきて日頃の自分の行いがアクアを通じて帰ってくるだなんて。いや、確かに盗んでます。たまにここで酔いつぶれた冒険者の財布を『スティール』で奪ってます。そしてそれをアクアに自慢してました。でもね、なんでそれを実行するこの駄女神いいいいいいい!!!
「全く、ほんとにこの二人はどうしようもありませんね。まあ、私も盗賊スキルで財布を盗むのには賛成しますが」
「全くだ。他人の物を盗むな・・・ちょっと待てめぐみん。いまなんといった？」
「ん？　何か変な事を言いましたか？」
「・・・いや、なんでもない」
ああどうしよう。割とマジな方でこのパーティー崩壊してる

「ねえザギさん。私いま、市場に売りに出されに行くモンスターの気分なんですけど・・・」
クエストへ向かう道中、檻の中のアクアがそんなことをつぶやいた。今から俺たちは、湖の浄化という簡単なクエストを受けに行く。一応水の女神のアクアは、触れてい

るだけで水を清める効果を持っているらしく、この能力を使えば他のクエストを受けるよりも比較的楽にクエストをこなすことができる。ちなみにアクアが檻の中に入っているのは、湖に要るモンスターに食われないためだ。

「それにしても、こんなものまで貸し出してくれるなんて、ギルドも随分太っ腹ですね」

「まあ、向こうとしても冒険者に死なれなくないからだろうな。あの首なしの事もあるし」

アクアの入った檻を乗せてる台車の上に座る俺とめぐみんは、そんな話をしていた。あの首なしの一件以来、ギルドにいる冒険者の数が極端に減った気がする。全員あの首なしにビビッて宿から出ようとしないからだ。まあ、魔王軍幹部がいるのに呑気にクエスト受けてるもの好きなんて俺たちぐらいだろうな

「おーいダクネス、スピード落ちてるぞーもっと足に力入れろ」

「ヒィイン！」

手に持っていた鞭でたたいたのは、目の前で台車を引いているダクネス。檻は借りれたが、さすがに馬まで借りる金は持ち合わせていなかったので、この中で一番体力と力のあるダクネスに引かせている。あ、ちなみにこれは双方合意の上で行っているので別に問題はない。

「こ、こんな事をされて、人としての尊厳をぞんざいに扱われても、わ、わ、わたしはー

！」
「ほれほれー早くしないと、鞭で叩いてやらないぞー」
「わかりました！　全力で引かせていただきます！」
なんだかブツブツ言ってたので、脅しをかけて全力を出させる。うん、この状況に何の疑問も抱いてないアクアとめぐみんはほんとどうしたよ。
ダクネスの全力疾走で台車を引くこと十数分後、体中鞭で叩かれているにもかかわらず、この上ない快感を得て満足しているダクネスを尻目に、アクアを湖の真ん中に放置していた。
「なんだか、今回は比較的楽に終わりそうな気配ですね」
「ま、今回はアクアに任せるしかないからな。俺達はトランプでもして遊ぶか」
「とらんぷ？　それはザギの住んでいた国の遊びですか？」
「んーそういうわけでもないが、暇つぶし程度にはなるからやろうぜ」
こうして、暇つぶしに作っておいたトランプを使ってババ抜きを始める俺たち。因みに罰ゲームは帰りも俺たちを乗せた荷台を引くというものにしたらダクネスが食いついてきた。うん、こいつ本当にバカだ。

２時間後

「助けてざきしゃあああああん！　ワニが！　ワニがあああぁああ!!」
湖の真ん中でワニ型のモンスターに襲われているアクアは、まるでサルのように俺の名前を叫んでいた。だがそんなアクアの叫びに反応することもなく、俺たちは１２回目のババ抜きをしていた

４時間後

「〈ピュリフィケーション〉！　〈ピュリフィケーション〉！　〈ピュリフィケーション〉！」
「アクアのやつ、結構必死だな」
「まあ檻がミシミシと出してはいけない音を出していますからね。命の危機を感じているのでしょう」
流石にトランプに飽きた俺たちは、ワニに襲われながらも必死に浄化魔法を唱え続けているアクアを観察していた。
「ギャアアアア!!　檻がミシミシ言っちゃってるんですけど！　今バキッって音が聞こえたんですけど！　助けてざきしゃあああああああん!!!」

「あの檻の中、ちょっとだけ楽しそうだな・・・」
「頼むから行くなよ？」

７時間後

来た時とは見違えるほどに綺麗になった湖。その中心にはワニに噛まれてボロボロになったアクアの入った檻があった。ワニたちは湖が浄化されたことによって別の場所に移り、もう姿は見えない。

もうアクアの悲鳴は聞こえてこない。というより、もう一時間ほどアクアの声を聞いていない。

「アクア～大丈夫か～？」
「もうワニはいないので、出てきても大丈夫なのですよ？」
「そうだぞアクア。それにさっき3人で話して、今日の報酬は全部アクアに渡すことにしたんだ。３０万エリスは全部アクアのだぞ」

俺、めぐみん、ダクネスの呼びかけに答えないアクア。

虚ろな目で綺麗になった湖を見つめたまま、アクアは言った。

「檻から出たくない。このまま連れて帰って・・・」
「「・・・・・」」

引きこもりになってしまった

「おーいアクア、もう街についたからいい加減檻から出ろよ。街の奴らの視線が集まりまくりなんだが」
「多分それは私たちがダクネスに台車を引かせているのもあるからだと思うのですが」
頑なに檻から出ようとしないアクアを無理やり連れて帰ってきた俺たちは街の奴らからの冷ややかな視線を一身に受けていた。
檻に入ってブツブツと暗い歌を歌っているアクアに、重い檻に3人分の体重が乗っかっている台車を引くダクネスに、その上に呑気に座っている俺とめぐみん。うん、別にどこもおかしいところはない。ただ少し注目を集めやすいだけだ
「にしても、今回は一名を除いてみんな無事にクエストを終えられたな」
「ザギ、それを言うと必ず何か起こる気がするのですが・・・」
墓穴を掘った。安心しきってフラグを立ててしまった。こういう時は必ず何か起こる、いや起こらないはずがない
「めっ、女神様!?　一体どうして女神さまがこんなところに!?　今すぐ出してあげます

！」

で、出たーめんどくさい事しかしないやつー

突如現れた男は、ワニたちですら壊すことのできなかった柵を曲げると、中のアクアに手を差し出す。

てか今あいつ、アクアの事を「女神様」って言ってたから、多分死んでアクアにこっちに転生させられた転生者なのだろう。なるほど、となると腰から下げてる妙に強い力を放ってる剣が転生特典か。

「どうするお前ら？」

「めんどくさい事はこれ以上勘弁なのですが、流石にこれ以上アクアを見捨てるわけにもいきませんし」

「私もめぐみんに同意見だ。大切な仲間が見知らぬ男に襲われるのは、騎士として見過ごすわけにはいかない」

めぐみんが杖を、ダクネスが剣を構える。どうやら二人は殺る気満々のようだ。

今は金があっても足りないぐらい厳しい状況だ。仲間に手を出そうとしている見知らぬ男の身ぐるみはがしてお金に換えても別に問題ないだろ？

俺も台車からメイスを下すと、二人に指示を出した

「あの男から金目のものすべて奪えええええ!!」

「「うおおおおおおおおおお!!!」」
「え？　ちょっ、待っ、ギャアアアアアアア!!!」
街中に見知らぬ男の叫び声が響き渡る。
その後、檻の修理費で報酬の３０万エリスは１０万エリスにまで減ったが、男から奪った装備やらなんやらを売って２０万エリス稼いだので、その日の夜は久しぶりに贅沢な食事が食えましたとさ。めでたしめでたし